正 し い 文 章 作 法

ＴＳコンサルタントグループ

論文での文章記述は、文部科学省(旧科学技術庁)制定の正しい日本語を用いることが基本であり、合否に影響すると考えて正しい日本語を使用することが必要です。
論文作成にあたっては、次の点に留意して行ってください。

①現代表記であること
漢語調は不可であり当用漢字ではなく、常用漢字を使うこと。ひらがなと送りがなは旧科学技術庁どおりでなければ、日本国家の文章とは認められない。
②昭和56年10月以前の国語辞典は古い日本語であるため、使用しない
③専門用語はJIS用語規格等で確認する（JIS Z8301を参考とする）
一人一人　→　一人ひとり
1つ、2つ　→　一つ、二つ（1つ、2つは設問でも使用されているが、基本は漢字であるため、状況により使い分けること）
④誤字、当て字、略字に注意。特に「同音異義」の間違いが多いので注意
（例：変わり、代わり、替わり、換わりなど）
⑤国文法に従った技術論文、規定文書類とする
主語を忘れないこと。「テニオハ」についても意味が違ってくることがあるため注意する。
⑥ワープロの使用と注意
日本語処理機能により自筆での間違いに気づかないことがあるので、ワープロだけに頼らないこと。特に間違い易い漢字については、一字ずつ確認して、手書きで練習すること。（例：完璧壁と壁、コミニュケーション→コミュニケーションなど）
⑦ひらがな書きの原則を守る
（現代仮名遣い 昭和61年7月1日内閣告示）
（送りがなの付け方 昭和48年6月18日内閣告示）
・本来の意味とは離れて補助的に使うとき
時　→　～ある<u>とき</u>、言われた<u>とき</u>
事　→　～である<u>こと</u>
通り　→　以下の<u>とおり</u>である
物　→　～する<u>もの</u>である
見る　→　～して<u>みる</u>
・接続詞として使うとき(品詞による使い分け)
経済効果が及ぶ(動詞)　　計画および検討(接続詞)
（「及ぶ」は<u>漢字</u>、「および」は<u>ひらがな</u>とする）
・接続詞は通常ひらがなとする。
又は→<u>または</u>　若しくは→<u>もしくは</u>　尚→<u>なお</u>　更に→<u>さらに</u>
・副詞は通常ひらがなとする。
（例：たくさん、せっかく、ずいぶん、さまざま、いろいろ、たいそう、およそ、ひたすら、やがて、わざわざ、あらゆる、いわゆる等）
ただし、ひらがなの副詞は「話し言葉」に近くなることから、論文に用いると文章が幼稚になるため、漢字も必要。（例：最も、単に、決して、必ず、今後、再び、全然、既に、直ちに、特に、例えばなど）

⑧量、単位、数値、式の書き方

・量記号は JIS Z820、単位は JIS Z8202 および 8203 に規定する国際単位系によること。(例：ミクロン→マイクロメータ(μm)、ホン→デシベル(db)、サイクル/秒→ヘルツ(Hz))

・単位記号の文字は原則として、半角小文字で表記する。
ただし、A(アンペア)、MB(メガバイト)などは大文字でよい。

・一般に馴染みのない記号は、極力使わず、カタカナで表す。(例：ベクレル(Bq)、ルックス(Lx)など)

・英語からの技術用語は、JIS 規格に基づき末尾には原則として長音符はつけない。　ヒーター　→　ヒータ
コンピューター　→　コンピュータ

⑨同音異義語、当て字、誤字

・同訓異義語
表すー現す、上げるー揚げるー挙げる、早いー速い、効くー利く、聞くー聴くー訊く、返るー還る、替えるー変えるー代えるー換える、収めるー治めるー納めるなど

・同音異義語
補償ー保障、時期ー時機ー時季、照会ー紹介、回答ー解答、絶対ー絶体など